

『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題 十

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題九』（愛知県立大学文学部論集 国文学科編 第五七号 平成二十二年三月発行）につづくものである。

凡例

- 一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。
  - 1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。
  - 2、丁付けは省いた。
  - 3、曲中に付したへ・シテ・アト・——等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（ ）で括って示した。
  - 4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。

6、宛字も多くみられるが、そのままとした。

𠄎 ↓喜 𠄎 ↓馬 ↓雁 𠄎 ↓シメ 𠄎 ↓より

竹類 (畜類) 御行所 (御教書) 字文 (呪文)

翻刻

ひくす

是ハ山城の国宇治の里に住居する者て御さる 宇治橋の供養も近ミに成て御さる 夫ニ付て明日ハちと志さず  
 日て御さるニ依てせつたいをしよと存る 先太郎官者を呼出シ申付る事か有る 如常 汝呼ス別の事  
 てない 宇治橋の供養も近ミニ成たてハないか 御意被成る、通り近かくニ成ました 夫ニ付て明日  
 ハちと志す日ちやニ依而茶をせつたいをしよふと思ふか何とあらふ 是けつこうな思召て御さり升 定  
 而大勢の同者て有うナア 御意被成る、通り大勢の参りて御さりませう 某の思ふハ先のとのかわきの  
 留るよふに釜の数を大分懸て湯をたきらせ茶を引ためて置いて出しにしよふとおもふか何と有う 是ハせん  
 じ茶よりハよふ御さりませう 左右あらハ汝ハ太儀ながら今から茶を引てくれい ハア畏てハ御さり升  
 か私は外ニ御用も御さりませう 是ハとうそ次郎官者に被仰付ませ イヤ爰な者か 夫ちやニ依て今朝山壹ツ  
 あなたへ行けといふたれハ足かいたと言ふたニ依て次郎官者をやつた 是悲共汝引ケ 左様ならハ畏て御さ  
 る 先夫ニ待て 心得ました ヤイハア 此様な事も有ふかと思ふてひくす

を大分のけて置た 是を引てくれい 畏て御さる 某ハ用事有て山壹ツあなたへ行 留主の内寝むらぬ  
よふ二情を出して引ケ ころへました 左右あらハ身共ハ最ふこふ行そ 最早御出被成升か

頼而戻ふそ 頼而御帰り被成ませ ホとつと行せられた 扱ミ迷惑な事を言付られたと言ふて引すハ成  
るまい 先白を出そうエイくくくホ是ハ白の掃除ハして置かれた 先茶をうつそう さらハ引ふ ア、誠二頼

ふた人の様なしわい人ハ有まい 金所の御方ハひくすちやといふて人にとらせつ火ニくへつ川へ流しツさせらるゝに  
頼ふた人ニかきつてひくすをのけて何にせらるゝと思へハモあのよふなしわい人ハ有るまい ア、是ハいかふ

ねむふ成た 惣して世に茶を引と馬にゆらるゝ程ねむふ成る物ハないといふかア、いかうねむい事ちや 此様な事と  
知たらハ今朝足かいたと言ふまい物を アミ是ハいかうねむい事ちや 是とも宇治橋の供養か有るに依ちや

宇治橋の供養がなくハせつたひもせられまいしせつたひもなくハ道者も有るまいし道者もなくハ此様二茶も引かまい  
物を ア、うるさやのせつたひやのうるさやのくせつたひやのくよふく只今戻て御さる 亦承はれハ

太郎官者に茶を引せらるゝと承た ほふばいのみよしみ二見舞ふて遺そふと存る 扱此太郎官者ハとれに居る事ちやしら  
ぬ イヤあれ二つくりとして居る ヤイくく太郎官者ヤイ太郎官者 ホ次郎官者戻たか ヤ今戻たか

そちハいかうねむるナア 是は如何な事 世に茶を引と馬にゆらるゝ程ねむふ成る物ハ無いといふかアミね  
むい事ちやわいはい 是は如何な事 ヤイくくヤイ太郎官者 ヤア して夫ハいかふ色の悪ひ茶

ちやナア 是ハよい所へ気が付た 色の悪いこそ道理なれ ひくすちや 是ハ如何な事ヤイくく太  
郎官者 ヤア シテ引くすを何にせらるゝ 是は如何な事ヤイくく宇治橋の供養か近ゝに成たに依て

らるゝ せつたい 是ハ如何な事ヤイくく太郎官者 ヤア 正くすを引て何にせ  
らるゝ されはの事ちや 宇治橋の供養も近ゝに成た二依て せつたひをしよふといやひ

ふ成 ア、いかうねむる事しやヤイくく太郎官者 ヤア アミヤイくく其様に早ふ引な 茶かあら  
ふ成 是ハ如何な事 言葉の下からねむるヤイくく太郎官者

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

は如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事 是ハ如何な事

本 ヤア 次 そちハ其よふにねむるは何と目の覚るよふニ嘶をしよふか 本 ヲ、是面白からふ咄て呉い

次 心得た 本 是ハ面白からふ 次 先此中月の夜に山一ツあなたへ御使に行て川向ふを通つたれば若イ者

か大勢寄て角力を取て居た 本 フム 次 中二も小兵な男か出て座中の者を毎く取てなけた 某もたまり

兼て頓て土俵へとんて出て先やつといふて手合をすると頓而某の右のかいなをじつととらへた 本 フム 次

篤と取らへさせておいてきりくと二三へん引廻ヌ処を小またを取て大地へすていどうとなけたか何とおひたミ敷い

手からをしたてハないか 是ハいかな事ヤイくくく 太郎官者 本 ヤア 次 そちハ今の咄を聞たか 本

あの咄しか 次 中く 本 ヲ、聞たく 次 聞たく 笑 夫は何んと聞た 本 何に今の咄しか 本

次 中く 本 今の咄は此中の月の夜に時鳥か鳴いたか 次 笑 是ハ如何な事ヤイくくく 太郎官者

本 ヤア 次 是ても目かさめすハ某ハ此中舞ヲ稽古するか何と目のさむるやうに一さし舞ふて見しよふか

本 ヲ、是ハ面白からふ 本 そうあらハ一さし舞ふてくれい 次 左右あらハ汝は寝むらぬよふに地を謠ふてくれ

いよ 本 心得た 最早 寝むる事てハないぞ 是ハ面白からふ 舞あかり口伝 有りセツ子 次 是ハ如何な事 太郎官者

くヤイ太郎官者 此度ハしよふたいものふねおつた 扱く腹の立事ちや 何とそ奴か目をさまして気もつぶす

よふな事かしたい物ちやか是ハ先何とした物て有ふぞ イヤ思ひ付た致様か有る 面ヲキセル 是く是てよい 先様子

を見よふと存る 本 ムミよふ寝た事かなく 扱もくくしよふたいものふ寝た シカくアツテ 是ハ枕下りに寝たか

けんかいこう顔かおもはれたよふな イヤさつと手水を遣ふか イヤくまた茶かいくらも引ぬ 今二も御帰りに被成

る、と悪い 先情を出して引ふ 扱もくくしよふたいものない事かな 主 よふく只今戻て御さる 太郎官者か嘘

待兼て居るて有う ヤイく戻たそく 本 ホ御帰りに被成ましたか 主 のふおそろしや鬼か来たあちへ行ケ

く 本 あちへ行ぬかいやい 本 アミ申くこれへ鬼か出参りました 主 已か鬼ちや 早ふ行かぬかいやい

く 本 アミ申く私は鬼てハ御さりませぬ 太郎官者て御さり升 主 イヤく鬼の太郎官者ハ持たぬ 早

ふ行ぬかいやい 本 申く何事て御さりまする 主 何事といふ事か有る物か 鬼か来た 次 誠

二鬼か参りました 早ふ行ぬかいやい 本 アミ申く声てなり共御聞知り被成て被下 私はしやうしんの太郎官  
 者て御さり升ス 主 フウ誠ニ声ハ太郎官者ちやか何として其よふなつらに成たそ 本 ハア余り合点の行ぬ事  
 て御さる 次郎官者其鏡を見させてくれい 次 心得た さらハ鏡を見しよふ 本 是へくれい 次 心得た  
 仕方色、 本 ナク今迄ハ誰わかるかれと思わなしたか何のいんくわて此様なつらになりくたつた事ちやナク  
 次 笑 ナイセウ 本 モ此つらてハ何方へ参てもいけておく者は御さり升まい またおなしみハ頼ふた御方で御  
 ニテ さる 只今までの御奉公は成ませすともとふそ御釜の下の火成ともおたかせ被成て被下 主 イヤ爰な者か 台処  
 へは女童へも行所ちや二鬼か居てハならぬ 早ふ行ぬかいやい 次 ハアミ行かぬかいやい 本 左様なら  
 ハとうそ御門番ニ成り共被成て被下 主 イヤ爰な者か 鬼か門いれハなら人の出入かならぬ早ふ行ぬかいやい  
 次 サアく早ふ行ぬかいやい 本 ハアヤ申く左様ならハとふそ御医者方に御見せ被成て鬼の直る御  
 薬を御つけ被成て被下 主 またぬかしおる医者ハ病こそ直せ鬼の直る薬ハない 早ふ行ぬかいやい 本  
 ハア行ますくナク 次 アミ申く最早私かいなし升る 此方ハ奥江御出被成ませ 主 左右あらハ身共は奥  
 へ行程に早ふいなせて呉い 次 畏て御さる サアく鬼殿も早此内にハかなわぬ とつと、出て行かします  
 本 汝迄か其様にいふ 犬もほふはい鷹もほふはいといふ 汝か部屋に成り共かくまふてくれい 次 イヤ爰な  
 者か 犬もほふはい鷹もほふはいなれ共鬼のほふはいハ持たぬ 早ふ行ぬかいやい 本 ハテそふ言わす共平  
 にかくまふてくれい 次 ハテ某はいやちやわいはい笑 本 次郎官者 次 何ちや 本 ありや何んちや  
 次 ヤイうつけ 本 何ちや 次 某に舞をまわせつ咄をさせつして余り心よふ寝て居たニ依て鬼の面を着せ  
 て置たのちや 本 すれば汝かしたわさか 次 中く 本 扱く悪ひやつの己ニも着せておこうか  
 次 アミゆるしてくれい 本 やるまいそく 次 アミ先待てく 本 待とハなんと 次 最一  
 さし舞ふか も一ねいりせぬか 本 己また其つれをいふか 次 アミゆるして呉い 本 やるまいそ

アト主 長上下

シテ 太郎官者 如常

アト 次郎官者 如常

入用 かつら桶 武悪面

各 柿

シヤ 当所に住居する柿商売する者て御座る 今日ハ当所の御神事で御さる 罷出柿を商ふと存る(道行) 誠二世に有  
時は哥をよみ連歌杯を致したニ今ハケよふニ商売を致す事ちや 何かと言内ニ社頭ちや 先是ニ棚を飜ふ シミ申柿  
の御用かあらハ仰付られい イヤ先是に寄て参詣の人を待ふと存る 何れも同  
道致御社江参詣致ふと存る 何れも御さるか 各 是におります 頷 今日ハ当所の御神事で御さる 何れも同  
社へ参りませう 各 一段とよふ御さらう 子 私も参りとふ御さる 頷 今日ハ御神事で御さる 去年のことく御  
へ御され 子 心得ました 頷 サア〜御され〜廻る各〜シカ〜アリ 頷 如何にも連達ませう 子供衆ハ先  
て御さる 去年参つたを近い事のよふに存たに早一ト年セ立て御さる 各 言わせらるゝ通りて御さる 各 言わせらるゝ通りて御さる 各 言わせらるゝ通りて御さる  
頷 何かと言内に神前で御さる 何れも拜ませられい 居テヲカム 各ヲ見テ 頷 イサ下向致そふ タツ 頷 イヤいこふ賑敷事ちや柿を召せ〜是〜柿をかわせられい イウナリ 頷 是ハ合柿と申て外ニ御さらぬよい柿て御さる 頷 イヤ  
〜各シカ〜 頷 何んと其柿ハよい柿か 頷 扱〜こなたハしふいやらむまいやら知らせられまい 惣  
して柿にねり木さわし蜂屋柿美濃柿御所柿八王寺柿久保柿円座柿と申て品々御され共是ハ合柿と申て外ニハ御さらぬ

此様なあまい柿ハ是悲とも求て帰らせられい

イヤ〜必しふい物ちやおかせられい

是悲ともと言

夫ならハ身共か心見をして見よう

夫にハ及はぬ

いかにも喰ふて見させられ

のふ

〜 洪や何れもおかせられい

某も喰ふて見ませう

いな事を言わせらるゝ此柿か洪かろふ様

かない 頭 お主喰ふて見よ

扱〜あまい事ちや

あれ〜洪そふな顔ちや

いかな〜しふ

うない 頭 洪い顔ちや

最壹ツ喰ふて見よ

何か程成り共喰ふて見ませう

むまい〜

れ〜 洪に極りました

洪柿を喰ふて

ハうそかふかれぬとやら申

うそをぬかせて見ませう

シカ〜

各 サア〜うそを吹て見よ

あれ〜得吹きませぬ

夫ならハとのよふに吹ませう

頭 身共か吹て見せう

是〜かわりを渡させられ

扱〜横着物で御さる

りませう

各 シカ〜

是〜かわりを渡させられ

買もせぬに何のかわりをやるふそ

最

前から各も喰身共二も喰せて其かはりをおこすまいと言事か有る物か

そちか喰ふた物にかわりをやるふよ

か無い

是悲共ト言

兎角きやつハ横着者ちや

うちた、かせられい

是ハ何とする

扱〜悪ひやつ

己かよふな者ハまつこふして置たか能い

覚へたか〜

〜 サア〜皆御され〜

各 シカ〜

あいた〜ヤイ〜此様に道よくな事をすると言

ふ事か有物か

しないたり〜 返せ合柿〜とよへとも〜とり残さるゝ

本にすみながら哥を案してそらうそを吹せたひしためしもあり

うたてや我かうその吹れぬ口をかきむしりこうかい

しつ、頭を柿のくしさにあらねともひろひ入たる柿を持ち我か宿に帰りけり〜

シテ 当所者 半ニテモ羽織ニテモ

アト 立衆 長上下

入用 棒かこ

是は此当りの者て御さる 此中あなたこなたの御道具くらへハ打続た事ちや 亦此度ハ鎧腹卷をくらへらりや  
 うとの事ちや 身か内に有をもないをも存せぬ 先太郎官者を呼出し承ふと存る 如常 汝呼出別の事  
 てない 此中方々の御道具くらへハ打続た事てハないか 御意被成る、通り毎日の事て御さる 夫二  
 付て此度ハ鎧腹卷をくらへさせらりやうとの事ちや 身か内に有るか 御道具ハ每々覚へており升か左様の  
 物は見当りませぬ 何と又都には有ふか 何か扱都にないと申事ハ御さり升まい 夫ならハ汝は  
 太儀なから都へ登て鎧腹卷を求て来い 畏て御さる 鎧腹卷ニハ色々小道具か有る 兜小手当ほう当亦  
 さつくと着ておとす物か有るけな かまへてぬかるな 心得ました 急て行て頓而戻れ 畏て御  
 さる エイ ハア扱々急な事を被仰付た 先急て参らふ 誠ニ頼ふた御方ハ結構な御道具を御持被成て  
 ついに勝負に御まけ被成た事かない 夫故某も様々の御道具を拝見する事ちや イヤ何角と言ふ内に都ちや ハミア  
 賑やかなちや 某の在所杯とハ違ふて家居杯もきれいな事ちや イヤ身共ははたとわすれた事か有る 鎧腹卷かとの  
 様な物やら又ここに有物やら存せぬ 在所て篤と問ふてくれハ能かつたものをはる々の所を問ひニハ戻られす何と  
 した物て有うそ ハミアさすかハ都ちや 売買ふ者も呼はつてあるけハ物事調ふと見へた 某も此辺りから呼はつて  
 参ふと存る シミ申そ二元二鎧腹卷ハ御さらぬか 鎧腹卷か求ふ御座る 鎧腹卷か求ふ御座る 夫は  
 是は洛中ニ住居する心の直にない物て御座る あれハ田舎者と見へて何やらわつはと申 きゃつ二ちとたつさわつて  
 見よふと存る のふくそなな人 此方の事て御さるか いかにも其方の事ちや 海道一はい何をわつ  
 はおしやる 田舎者て御座ればりやうしハ申さぬ 真平御免なれ イヤくりやうしをおしやると言  
 ふてハない 殊ニ寄たらハ叶へておましょふかといふ事ちや 夫は忝ふ御さる 某は鎧かほしさに此よふ二呼



はつてありく事て御さる ウリ して其方ハ其鎧屋を知て居さし升か 本 是ハ都人とも覚へませぬ存せぬ二依て  
ケ様に呼はつてありく事て御さる ウリ 是ハ身共かあやれ事ちや 本 仕合と申てもこ

ふ見へた通りの者て御さる ウリ イヤ〜其様な袖妻に付た仕合てハない 某におはやつたか仕合といふ事ちや

本 其方に逢ふたか仕合とハいか様な事て御座る ウリ 洛中に人多しとハ言へ共鎧屋の亭主ハ某壹人ておりやる

本 すれハ身共は仕合な者て御さる 扱鎧か求ふ御さる 見せて被下 ウリ 如何にも見せう先夫に待しませ

本 心得ました ウリ 田舎者をむまん〜とたばかつてハおされとも何を鎧ちやと言ふて売て遣ふ物かないイヤ  
爰に鎧の事を書た物か有る 是を面白ふおかしう申て売て遣ふと存る のふ〜是を見さしませ 本 とれ〜是

へ被下 ウリ 心得た 本 イヤ〜是ハ入ませぬ 其鎧腹巻を見せて被下 ト言テ ウリ 夫は其方か知らぬ二依

てちや 是か鎧ておりやる 本 扱〜思ふたよりも違ふた物て御さる 夫迄て御さるか ウリ 中〜 本 腹

巻とやらいふ事を申されました ウリ 成程腹巻といふ事も是を腹にあつれハ則腹巻ておりやる 本 亦兜小手当

杯か有とやらいわれましたか ウリ 扱〜其方の頼ふた御方ハ鎧か御功者な是を腮に当れハ腮当手に当れハ小手当ひ

たいに当れハ甲すねに当れハすね当いか様にも成る事ておりやる 本 尤て御さる 是へ被下 ウリ 心得た

本 鎧腹巻を御調法被成る、ハ何とした事て御さる ウリ 不審尤ちや 今ハ天下納た御代て左様な事はなけれ共

若シ人のかたらいに寄せられて軍陣杯に御立被成る、時鎧腹巻を御馬の先江持せらるれハたとへ敵万〜たりとも

夏の蚊はいを太うちハてあをくか如くまつた雪に煮湯をかくる様に片はしからめつき〜とめつきやくするに依て夫

故殿方二も御調法被成る、事ておりやる 本 すれハ御調法被成る、も尤て御さる 夫ならハ求ませうか代物ハい

か程て御さる ウリ 万疋ておりやる 本 夫ハあまり高直に御さる 最そつとまけて被下 ウリ イヤ〜鎧に

かきつて負ハないやならハ置しませ 本 夫ならハ求ませう 代物ハ三條の大黒屋て渡シませう ウリ 大黒屋

存して居る あれて請取ておりやらう 本 最ふこふ参る ウリ 最早お行やるか 本 ハアまた失念致た事か

御さる ウリ 夫は何ちや 本 さつくと着ておとす物か有ると申されました ウリ 扱〜夫は御功者な事ちや

先夫ニお待やれ 本 心得ました ウツ 扱ミ迷惑な事を申さつくと着ておとす物にほふとこまつた 何とした

物て有ふそ イヤ思ひ付た 致しよふか有る かつら桶 持出ル正面ニ置 ウツ 是レ此内にある程に此儘持てお行きやれ

本 とれレ先明て見ませう ウツ イヤレ見する事ハならぬ 何方へうると有ても見せぬか鎧屋の法ておりや

亦むりにお見やれハ其方の為に成らぬ 本 夫ならハ見ますまいか頼ふた者か見よふと申されたれハ何と致そ

う ウツ 夫は鎧主の事ちやニ依て苦敷うない 見ようと仰らるゝ時蓋を取て御目ニ懸さしませ 本 心得ました

ウツ 扱其方ハ物をお書やるか 本 書と申程の事ハ御さらぬか雀の踊た足跡のよふな事ハ書まする ウツ 夫は

一段ちや 其内に委敷書て有る 頼ふた御方によふて聞さしませ 本 心得ました ウツ 亦ひすへしレ 猶口

伝有と言事か有 其子細ハ最前からいふ通りとこへなり共当たたい所へ当る口伝ちや 随分兎相ニせぬよふニあかまへ

てさしませ 本 心得ました 左右あらハもふこふ参る ウツ お行ややるか 本 ハア ウツ 能おりやつた

本 ハア イトマコイサラハク なふレ嬉敷やレ 先急て下ふ 誠に一段の鎧腹巻を求て此よふな悦はしい事ハな

い 頼ふた人に御目に懸たらハ嘘そ御悦ひ被成るゝて有う イヤ何角いふ内に戻た かつら桶大コサニ 頼ふた御方御座

り升か レ 如常 注 やれレ早かつた 扱鎧腹巻を求て来たか 本 一段の鎧腹巻を求て参りました

注 急て見せい 本 畏て御さる 注 とれレ 本 ハア 注 是ハ倅か手習をすと思ふて手本を求

て来たか 是ハいらぬ 急て鎧を見せい 太らへ渡ス 本 扱ミ頼ふた御方ニも御存シないと見へました 是か則鎧

腹巻て御さる 注 何ちや夫か鎧ちや 本 左様て御さる 注 扱ミ思ひも寄らぬ物ちや して小道具ハと

こ二有る 本 其事て御さりまする 是を腹に当て升るニ依て腹巻亦ひたいに当れハ兜 手に当れハ小手当臈おんに当

れハほふ当ていか様ニも成升る 其上委敷事ハ書印て御さる 御聞被成とう思召ハよめと申ました 注 左右あら

ハ聞ふ程にしよう木を持て 本 シカレ 書懐中シテ床木ヲ持出真中ニ 置ク主コシ懸而右へ開下ニ居テ 注 サアレよめ 本 ハア私か腰ヲ

かくるて御さるおりさせられい 注 イヤ爰な者か 主の前て腰をかくるといふ事か有る物か 本 左様てハ御

さらねとも鎧やか申二ハ兎相ニないよふニ随分あかまへと申ました 私の腰かくるてハ御さらぬ 鎧の恐れて御さる

ニおりさせられい 主 夫ならハ心得た 本 下ニ御座れ 主 己に腰をかけさせて何と下ニ居らる、物ちや

本 兎角鎧糸の恐れて御さる下ニ御され 主 色くくの事をいゝおる 下ニ居ル 主 急てよめ 本 心得ま

した 書ラヒラキ両手 本 初春の能きひおとしのさせなかハ皆小桜おとしと成二けり 主 扱又夏ハ卯の花の垣根の水

ニテ差上ヨム語り 本 洗川秋に成つての其色ハ毎も軍に勝負の紅葉にまこ錦川冬ハ雪けの空はれて甲の星も菊の座もみな花やかにおと

しけの思ふ敵を打系の永く我名を上巻や後ろを敵に見せされは是そかれいの御鎧扱家居に帰りつゝ大筒しゆかいすへ

ならへ一家一そく 主 扱は箱に納れハ弓ハ袋を出すして国もゆたかに民榮へ治る御代そ目出度此家そ目出度かり

ける 秘すへしく 主 猶口伝アリ 主 扱ミ目出度物ちや 此の秘へしく 主 猶口伝有とハ何の事ちや 本 是ハ

最前も申升通り甲小手当杯のいたしよふて御さる 主 扱ミ目出度物ちや 主 さつくと着て落す物は何ちや 本 あれに置ました 取

て参りませう 主 急て見せい 本 心得ました 取 二人カツラ桶シテ柱ノ 本 さらハ見よう 蓋を取見テ肝ヲツフス

本 扱く興かつた物ちや 主 ヤイく早ふ見せい 本 ハア是ハ御ろうせられすともおかせられい 主 イヤ爰な者か 急て見せい 本 其

主 いらぬ事を言わす共早ふ見せい 本 平ニ御無用ニ被成ませ 主 ハア是ハ御ろうせられすともおかせられい 本 其

よふニ被仰る、ならハ御目ニ懸ませう 本 ア、是ハ御無用で御さるか 主 早ふ見せい 本 いらぬ物て御さる

大コサエ行面ヲ着テ 本 是かさつくと着て落す物て御さる 主 何か 本 是かおとす物て御さる 袖取る

袖ニテ顔ヲカクシ出ル 本 ハア 主 エ 本 ハア 主 何か 本 是かおとす物て御さる 袖取る

主 わけもないひさりおろう 本 ハア 主 エ 本 ハア 主 何か 本 是かおとす物て御さる 袖取る

シテ 主 如常

アト 太郎官者

売人

入用 武悪面 葛桶

平六と申て弟子か御さる 細工かなくハ下る様ニと申越た 此度尋て下り仕合を致シ直そふと存る 誠ニ師弟の中程たのもしい物ハない 手前ならぬをこゝろに懸て下る様ニと申て節々申越た 今度下たらハ無悦ふて御座らふ イヤ何角といふ内に越前の一条ちや 幸ひ是に塗師と印て有る 是て尋ふ 物申案内申 内ハ誰そ 某は都方の者て御さる ぬしの平六と申は此辺りてハ御さらぬか 平六ハ是て御座るか殿方て御さる 是て御さるかヤレ々嬉敷や々平六の為にハ塗師の師匠て御さる 常々承りました先こふ通らせられい 心得ました先平六ニあわせて被下 成程心得ました先夫にゆるりと御され 扱々氣の毒な事ちや あの人ハ塗師の上手と聞た 平六殿ハさのみ上手てハなけれ共爰元ハ塗師かすくないニ依て細工もはやる あの人か爰に足を留させられたらハ平六殿の為にわるからう 何と致そふそ イヤたはかつていなそふと思ひ升 おくたひれハ休りましたか さのみくたひれも致シませス早う平六に逢して被下 平六殿の事を仰らるれハなつかしう思ひ升スナク 平六か事を言へハ落涙をおしやる 何とそしられましたか 平六ハ去の秋死れまして御さる ナク ヤア何に平六ハ死にましたか 左様て御さる 是ハ如何な事 常々心に懸て頼母敷ういふてくれたか此様なにか々敷事ハない 其方も御内儀そうな心中をさつしました 平六殿か生て入れたらハ無悦はれませうニ此よふなかなしい事ハ御さらぬ シテのふく急かしやく 去ル方へ細工に參たかうるしかたらいて取に帰る 女共内に居るか女共々々エイお師匠様御下り被成ましたか エイ平六先ハ息才て嬉敷御さる 随分息才て御さり升ス 此方ニも御機嫌よさそうて御目出度ふ存升 やれ々よふこそ御下り被成ました 扱私も色うるしの事ニ付て御尋申たい事か御座り升る

夫は安い事ちや 身共か覚へたたけハ随分覚へておませうそ

夫は難有ふ存升

扱、気毒な事ちや

シイヨフ

イヤ先行て参りませうゆるりとお休被成ませ

行て来さしませ

何事ちや

エイ爰な者か あれへ出るといふ事か有る物か

そちか知らぬニ依てちや

あれハ常々咄した都のお師匠ちや

わいやい

夫は合点なれ共其方お死あつたとい、ましたわいの

何ちや死たと言ふた

中く

是ハ迷惑な事ちや 此まめて居る者をしんたと言ふ事か有る物か

されハ其事て御座る あの人ハ細工

か上手ちやニ仍而こ、元に足を留めさせられたらハ此方のさまたけと思ふてお死やたとい、ました

扱くわ

けもない事を言ふ そちも思ふても見よ

此様に細工のはやるも御師匠の御影てハないか其恩をわすれて逢すニハ居

られぬ 行そ

もく、気の毒な事ちや 御目に懸ろうと言へハひまをくれいといふ 今更何と成る物ちや

扱

ハさまをかへて出さしませ

ゆうれいニ成て出さしませ

夫程あれへ出たく

ハついにゆうれいニ成た事ハない

イヤ爰な人か 誰有てゆふれいに成た者が御さらふそ

聞かせられた事も

身共

有う程に取つころふて出させられい

左右あらハ取つころふて出よふ程にそこの首尾を頼そ

心得まし

た 頼そく

お淋しう御さります

のふお内儀 死もせぬ平六を死んたと言ふ事か有る物か

また言わせらる 今平六に逢ましたそや

何しニ童か偽りをい、ましよふ 去の秋しなれました

童ハ朝夕わする、隙ハ御座らぬに夢にさへ見ませぬ

さすか

ヤア夫ハ誠て御さるか扱もく、氣遣わしやく

すれハしん実死ましたか

何しニ童か偽をい、

ませう此様なかなしい事ハ御さります

扱もく、せひもない事ちや

そふおしやれは思ひ合する事か

有る 色うるしの事に付て尋る事か有るといふたか是ハちと覚へ残した事も御座る

すれハあの方でも細工をする

見へた 常々のほつて成り共お目に懸り度と申て居られました

扱もく、某程ふ仕合な者ハない 某の

手前ならぬを心に懸て頼母敷いふておくしたニ依てはる、尋て来たニ此よふな是悲もない事ハない

嘸草葉

の影ておなつかしう思われませう 最早くやみても返らぬ事此上ハ一へんの念仏を申て跡を申ふ 是ハ  
 平六か常く手なれられましたしやうこて御さる 御回向を被成て被下 成程心得ました 其方も是へ寄て御  
 念仏を申さしませ 心得ました 旅人ハ鉦こをならし女房とく念仏申平六かなき跡いさや申はんく  
 あらありかたの御用ひやなく 今ハ何をかつ、むへきは平六かゆうれい成るか御用ひのありかたさには迄あらわれ出て  
 候 扱ハ平六のゆうれいなるかや都にて見し時よりもおとろへはつるむさんさよ むかしハ花うるし今  
 ハとしたけ老色の うるしのはちもあたりたる職の有様さんけせよ いてくさらハ語てきかせ申さん  
 と 同輩 はつかしなからがき道のくぬしと成てせいしつのことくなるふちに望てうるしこしに水を入れて呑んとす  
 れハ程なく火ゑんともへ上ツて身はやけうるしとなりたるそや身ハやけうるしと成たるそふや 又或時はぬの  
 にまくれねじ木を入てしたねしにねしつめらるれハア、う心うるしはけの化そこなわいかならんと風呂のこかけに  
 入り二けりぬりこめたさやうと言事もく 此色よりこそ始りたり

シテ 平六

羽織半下タスキカケウルシ桶持  
後角頭巾面着ナカシ中ケイハケ桶もち

アト 師匠

角頭巾十徳半下

アト 女

如常

入用

鉦シモク 登リヒケ面  
ウルシハケ ウルシ桶  
ウルシコシ シユス

主アト 是は此辺りの者て御さる 壹人召仕下人か某に暇をも乞す何方へやら参つて御さる 承れは夜前罷帰たとわ

申せとも未某へ目見を致さぬ 言語道断悪ひ事ちや 今日ハきやつか私宅江立越へ急度せつかんの致そふと存る 誠

二暇をも乞ふて御座れハいか程も遣ふ物を忍ふて参つた処か言語道断腹の立事ちや イヤ何角といふ内にきやつか私

宅ハ是ちや 某の声と聞知つたらハ留主を遣ふて有ふ 作り声をいたし呼出さふと存る 物申案内申 太シヤ やら

奇特や夜前罷帰たを早殿方やら御存有て表二案内かある 案内ハ誰そ 物申 殿方で御さる 扱ハ己ハ悪ひ

さりおらふ ハア 俄のいんぎん迷惑致ス ちと御手をあげられい ハア 扱ハ己ハ悪ひ

やつこの此中ハ誰に暇を乞ふて何方へ行て有るそ されハ其事て御さる 御暇之儀を申上とふハ存て御座れ共壹

人召仕せらるゝ下人の事て御されハ申上たり共叶ふまじいと存て忍ふて富士禅定致しました やら珍ら敷や

壹人召仕ふ下人か富士禅定をすれハ主に暇を乞ぬほふてすか ハア エイ ハア 急度せ

つかんのせうと思ふて是迄ハ立越たれ共富士禅定を致たと有らは恐も有此度ハゆるす已来をたしなめ 夫は誠

て御さるか 誠てのふてハ 一丈て御さるか 弓矢八幡助るそ やら心易や さつと済た

今迄ハとのよふに有た 常の御気色とは替らせられてすハ御手打ニも被成るゝ事かと存て身の毛をつめ

ておりました 汝か躰かそう見へた 身共も毎もよりハ腹か立た 此度ハゆるす以来をたしなめ 畏て

御さる 聞ハ汝は富士松を取て来たといふかしよふか 私ハ取て参りハ致ませぬ イヤくうそ

を言ぬ人に聞た つゝますとも有りよふ二言へ 左様の事も御座りませうか人の事つかり松を取て参りました

夫を見る事ハならぬか 御目に懸る分ハ苦敷う御さりませぬ 先こふ御通り被成ませ 心得た

夫を見る事ハならぬか 御目に懸る分ハ苦敷う御さりませぬ 先こふ御通り被成ませ 心得た

夫を見る事ハならぬか 御目に懸る分ハ苦敷う御さりませぬ 先こふ御通り被成ませ 心得た

夫を見る事ハならぬか 御目に懸る分ハ苦敷う御さりませぬ 先こふ御通り被成ませ 心得た

夫を見る事ハならぬか 御目に懸る分ハ苦敷う御さりませぬ 先こふ御通り被成ませ 心得た

夫を見る事ハならぬか 御目に懸る分ハ苦敷う御さりませぬ 先こふ御通り被成ませ 心得た

やナア 本 左様で御さり升 注 是をくる、事ハ成らぬか 本 最前も申如く人のことつかり松で御さる二

依て進る事ハ成ませぬ 注 夫ならハ打物にかへてくる、事ハ成るまいか 本 殊に寄りまして先の者かかゆる

事も御座りませう 注 打物といへハきやつか耳よりそうな 何とかようそ 本 何かよふ御さりませうそ

注 太刀とかよふか 本 あの備前三郎の御太刀で御座るか 注 中く 本 結構な御替へ物てハ御され

共先の者か太刀を持する程の風躰の者てハ御さりませぬ 是ハ同心致し升まい 注 夫ならハ鷹と替ふか 本

道物の御鷹 注 御座るか 注 中く 本 是も講議な御替へ物てハ御座れ共先に犬か御さりませぬ 注 犬か

ないに鷹ハいらぬ物ちや 馬とかよふか 本 黒の御馬で御さり升か 注 中く 本 何れもおろかのない

御替へ物てハ御座れ共先につなく所か御さらぬ 注 それこそ其者の家に繫といへ 本 あの馬ハかんか強ふ御

さつて小家の一軒や式軒ハ引崩し升 是も同心いたし升まい 注 同心せまいか 本 左様で御座り升 注 夫は能るふ出せ

松わほし、替物ハなし身ハこう行そ 本 申富士の造酒か御座り升る 壹ツ上りませぬか 注 夫は能るふ出せ

本 心得ました ヤイ頼ふた御方の御出被成た 御盃を出せ 何ちや替りかない 其古る裕なりとも持て行ケエ

イ 念のふ早かつた ハア不二の造酒で御さる 注 是へ寄てつけ 本 畏て御さる 注 富士の造酒を是て

頂戴すれハ禪定したも同事ちやナア 本 左様で御さり升 注 不二の造酒程有て能酒ちや 本 御氣二入ま

したらハいか程も上りませう 注 最壹ツつけ 本 心得ました 注 汝は此頃各の前へてすいさんをいうた

けな たらぬよい口ちやと仰られたかしやうか 本 私は何も申た事ハ御座りませぬ 注 イヤ、うそを言わ

ぬ人二慥二聞た こう請持た所て一句持て参う 本 左様ならハ兎も角もて御さる 注 こうも有ふか 本

早や出ましたか 注 手にもてる 本 シカく 注 かわらけ色の古裕 本 シカく、かんのくわへて参

りませう 注 兎も角もせい 本 ヤイ、汝か物をこハ高に言た二依て最前の古裕をはや御句に被成た 以来を

たしなめ エイかんをかへて参りました 注 是へ寄てつけ 本 心得ました 注 太郎官者今のを付ぬか

本 何とやらて御座りました 注 手に持てる 本 シカく 注 かわらけ色の古裕 本 シカく、こ



ふも申されませうか

何とちや

酒ことによる継目なりけり

一段と出来た

最早酒呑ぬ とれ

畏て御さる

身共これからすくに山王へ参詣する

私も参りませうか

扱、悪ひやつこの此

間暇ヲも乞す出あるきをするのみならず参りませうか

御供に参りませう

うせいて成ふか其上道すか

ら付合いふて得付すハ松を取るぞ

是はこわ物で御さり升

こわ物ともに持て参ふ跡成る者よしわしと

まれ

ヤイ、付ぬか

是ハ如何な事 汝ハ夫に何ヲして居る

あ

となる者よしはしと、まれと被仰たニ依て扣て居り升

ハテ是ハ句じやわいやい

御句て御さるか

中く

夫ならハつけませう

早う付い

式入り共渡れハしつむ浮橋の跡なる者よしはし

と、まれ 其仕方ハ見苦敷おけ

心得ました

山吹の花色衣ぬしやたそ

とへとこたへす

くちなしニして

ろくしよぬりし仏とそ見る

はすの葉の青きか上の青蛙る

飛白鷺ハ雪にま

かへり 年寄の白髪にまとう綿帽子

句か早イ

ハア

己か出来るま、にほふりやうもの

ふ言居る 最そつと静に付い

心得ました

黒き物こそ三ツならひけり

黒ひ物の三ツならんた

は何て御さりませうぞ

何んて有ふとも付い

もう付ましよふか

もう付ましよふとハ

句ハ最前から出来て御座れ共早いと仰らる、ニ依て扣て居まする

イヤ爰な者か 出来た句を付ぬといふ事か

有物か 早ふ付い

心得ました

中ハ子か両のはたなる親烏黒き物こそ三ツならひけり

亦仕方をしお

おけといふに

ハア

上もかた、下もかた

うつお木の元末た、くけらつ、き

下もかた、上もかた

是ハ最前の通りて御さり升

最前のハ上もかた、下もかた

是ハ下もかた、上もかた、ちや

すれハひつくり返して御さり升るか

ひつくり返そふともんとり

うたそうと句ハ身か儘ちや 得付ぬと松ヲ取るぞ

付まする三ヶ月の水にうつろふかけ見れハ下もかた、上

猶こわ物で御さる

もかた、また仕方をしおる

是からハなん句を持て参う

こわ物

共に持て参ふ 西の海ちひろの底に鹿鳴て

鹿子またらにうつハ白波

奥山に船こく音の聞ゆるハ

申く ちと申上たい事か御さる 何事ちや 最前西の海の鹿を奥山で鳴せ奥山の船を西の海で

こかせたらハ能い句か二句出来ませう物を 奥山で船をこかせうと西海で鹿を鳴せうと句ハ身が儘ちや 得付

すハ松を取るそ 付升る 山（四方樹を）のこのみや海渡るらん 一段と出来た イヤ何角いふ内に山王ちや 汝も是

へ寄て拜め 心得ました 此間造作か有たと聞たか鳥居のにの色か見事ちやナア 左様で御さる

此鳥居ニ付て一句持て参ふ 一段とよふ御さり升ふ 山王の前の鳥居に二をぬりて 赤

きハ猿のつらそおかしき ひさりおろ ハア 扱く己ハ悪ひやつの 某か呑ふ共いわぬ酒を富

士の造酒で御さる杯といふて吞せておつていろみしやうこの顔の赤ひか夫程おかしいか 是ハ迷惑な存升る

此方のおつらの事てハ御さらぬ 猿殿のお顔の事て御さり升 猿ハ山王の使者ちやと思ふてあかめて有るか

左様で御さる ゆるすたて 心得ました 汝と某といつ迄いふたり共言、尽す事ハ有るま

い 是よりむかふの一本薄（ま）まで行つかぬ内に早句を持て参ふ よふ御座りましよふ 是へ寄れ

心得ました つうと寄れ ハア 是も句よ ハア当句を被成ましたか ハツといふ

声にも己おじよかし けら腹たてハつくみ悦ふ 何んでもない事 ひさりおろふ ハア

エイ ハア

要太郎

シヤ 是は此辺りニ住居する要太郎と言者て御座る 某伯父を持て御座るか身共か大酒を呑ふて酔狂をすると言ふて

かけてさんくそ知らるゝと聞た 余り腹の立事ちや今日参り急度そん分のも言ふと存る 誠二人かいわふ共いはせ

まい伯父の分として影てそ知らるゝと言ハ言語同断腹の立事ちや イヤ是ちや物申案内申 表に案内か有案

内ハ誰そ 身共て御さる エイ悪太郎 そちならハ案内なしに通リハせて何と思ふて来た 何

と、いふ事か有物か けふは存分ぞんぶんの言事か有て来ました  
 呑ふて酔狂をすると言ふて影かげていこふそししらる、けなの  
 ハ其様な事ハ知らぬ 人ひとか無い事ことハいませぬ おいの事ことちや二依よて悪わるひ事こともあらハ直ただに言ふ 人ひとか影かげてそし  
 るなととハ其方かたニは似合にあぬ事ことて御ごさる  
 又また其つれを言ふ そちハ酒を壹いちツ呑のかすきぬ程ほど呑のふたらハよかろう  
 とこそ思おもへ夫おとこは誰たれそ人の中事ちゆうじてかな有あう  
 ハアすれは此方かたハ言いハせられぬか 何なにしニ言いふ 思おもひも寄よら  
 ぬ事ことちや ムウよもや此方かたのいわせられようようとハ思おもひませなんだか供達きゆうたつ共どもか其様そのさまに言いふたニ依よて余あまり腹はらか立たて  
 今いまのよふ二ふたいふたつつか扱ありやうしな事をいいましたのふ  
 そちと身共みどもか事ことて御ごさる 必かならず心に懸かて被お下くだる、な 何なにの心こころに懸かうそくる敷せうな  
 有あても苦敷くる敷敷うないいやい モウ身共みどもか事ことて御ごさる 必かならず心に懸かて被お下くだる、な 何なにの心こころに懸かうそくる敷せうな  
 い事ことちや 夫おとこならハもふこふ行い升しやう ア、ヤイい 中ちゆうく 壹いちツのふて行いぬか 何なにを  
 酒さけを壹いちツのふて行いぬかと言いふ事ことちや 何なにに酒さけを 笑わらのめと言いせらる、も伯父おやぢ父子ふしの  
 むなどいふも伯父おやぢ父子ふし是こゝろりや知しれた事ことハ御座ござらぬのふ 先まづゆるりと居ゐよ 心こころ得えました よもや伯父おやぢ父子ふしか  
 るさまに言いわりやうとハ思おもわなんだ サアいく呑のめ 是こゝろハ大おほ盃づきか出でました 壹いちツ呑のせうと思おもふて  
 大おほきいいの出でした 夫おとこは忝かたじけなく御ごさる 左様さやうならハ是こゝろへ被お下くだる 身共みどもか酌しやくをしよふ 是こゝろハ慮おぼ外そとて御座ござる  
 左右さゆうあらハつついて被お下くだる 心こころ得えたサアいく呑のめ ハア 丁度ていどのめめく 呑のめめく見みてももくく氣味きゐのよ  
 先まづ丁度ていど御座ござるハ 其通そのとおりちや 被お下くだます 呑のめめく見みてももくく氣味きゐのよ 是こゝろハ慮おぼ外そとて御座ござる  
 いのみよふちや ホ 何なにんと有あた 御酒ごしゆの善ぜん悪あくハ覚しるへませぬか只胸ただむねの当あたりかひんやりと致いただ迄いたて  
 御ごさる 左右さゆうあらハ最壹さいいつツのふて酒さけの善ぜん悪あくを覚しるへい 是こゝろに最壹さいいつツた過あさませうか 何なにの過ある事ことか  
 有あふ そふあらハかるううつついて被お下くだる 所ところふ言いすとも丁度ていどのめ かるう被お下くだる 何なにの過ある事ことか  
 御座ござり升あぐ 丁度ていどく ホ笑わら 又また丁度ていど御ごさるハ 其通そのとおりちや 被お下くだる 丁度ていど呑の  
 ミ呑のぐ よふ呑のむ事ことちや ホ 何なにんと有あた 今篤いまあつと呑の覚しるへました 何なにと呑の覚しるへた

いつ被下る、御酒二もあたまハ御座らぬか今日のハ取分能酒と呑覚へましたか様子はし御さるか すれ

ハそちに酒を呑せておしうない 是ハ去ル方より寢酒にせいとの遠来ちや 何御遠来 中く 被

さこそ某か申さぬ事か 並くの御酒でハないと呑覚へました 夫はよふ呑覚へた さあく呑め 被

下升か イヤ此方にいつそハ申そうくと思ひましたかア、せけんていこうほめ升そや そりや誰を 被

テ誰て有ふこなたを 夫ハ何と言ふてほむる 先第一御氣かけつこう成り其上悪太郎か参る度に酒を呑

めくといわせらる、あの様な講<sup>新</sup>講な人ハ有まいと申升 夫は汝が取りなして有う いかなく御酒

を被下る、と有てついしよふてもけいはくても御座らぬか只御慈悲深いと言升笑 夫は悪ひ事を聞よふニのふ

て悦ふ事ちや サアく呑め 被下升 呑く さあつかせられい また呑か ハ

テこんか悪ふ御さるわいの 酒ハをしまぬかよわぬ程のふたらハよかるふそよ いかなく此のよい御

酒に酔ふといふ事ハ御座らぬ 左右あらハ今度ハかるうつこふ イヤくかるいは氣味かわるい 丁度

つかせられい そりや有るハ 丁度く そりや有るハ ヲミ御さるく笑 ウミつよい

御酌ちや ちと上りませぬか 身共ハ酒ハ呑ぬわいの 誠ニ此方ハ酒ハまいらぬかこう請持た所は中

く月にも花ニもかへられた物てハ御座らぬいの笑 成程呑む身てハそふて有ふ共 サアく呑め 被

下升 ヲ、呑めく イヤモウひといきニハ行ませぬ ちとくつるけてたへましましよふ 御ゆるされませ

や 兎も角もして早ふのめ エイく笑 所てとそふちやさりとハそふちや あのをふなけつこ

ふな御人をあたに思ふたらハわちかかさまに當ふといミ升笑 夫は早や聞たわいやいサアく呑め 被

下升か イヤ此方ニちと見する物か御さる 夫ハ何ちや 此中是これを拵へました ア、あふな

いわいやいウミ此方ハこれかこわひか 其様な物を持ってけかをするなよ いかなくけか

をする事てハ御座らぬ 是を持ってあるけハ人かおそろしがつて側江も寄る事てハ御さらぬ笑 夫はいらぬ物ち

やサアく呑め 左様ならハ被下升 申 何ちや 兎角おじひ深いと言ミ升笑 エミ何

をぬかしおることちや 酒を呑ハよいかくとう成ニハほふとこまつた ペ ホ サア取らせられい ア 最壹ツ  
 呑ぬか ペ ハテ夫かくとう御さるわいの ア 心得た シ コリやいこふ面白ふ成た ハ 是ハ如 ハ  
 何な事 ヤイくヤイ悪太郎 シ ヤア ア そちハ行かぬか シ とこへ ア ハテ宿へハ帰らぬかとや ハ  
 い ペ フウ内へか ア 中く シ 夫をおれかわすれてよい物かエイく ア ア、其様な物を持  
 てけかをするなよ シ いかなくけかをする事ハ御さらぬいの笑 ア 夫はいらぬ物ちや シ 左様ならハ  
 もふこふ参り升 ア 行か シ ハア ア よふ来た シ ハアくくくくく笑 扱もく結構な人か  
 な 酒ハおしまぬか酔ぬ程呑め笑 是か酔ふてこそ面白けれ酔はいて何の面白い事か有う ちとうとふて行ふ  
アノ山 其方誰ちや身共へのおしきか 是ハ近頃迷惑な ちとサア御手ヲ上られ 平にくくお手を上られムウ何に  
 石か笑 ヤレく誰そと思ふたれば石殿かおしきを召れた サアお手を上られ笑 是ハ面白い事ちやハアミ是二道か  
 幾筋も有 とれを行ふそイヤ爰にちと寝て行ふエイくくくア、面白ハく ア 最前悪太郎か参つて殊の外  
 酔ふて帰た 心元ない見に参ふと存る 誠ニ酒を呑さねハ機嫌かわろしまた呑すれハ酔ニ依て気の毒ちや されハこそ  
 是にしやうたいものふ寝て居る 扱くくにかく敷いことちや 何卒此後ハ酒を留る様にしたい物ちやかイヤ致しよ  
 ふか有ーヤイ悪太郎 汝日頃悪心なニ依てか様なすかたとなす けふよりハ善心と成て後生を願へ則汝か名を南無阿  
 弥陀仏とつくるぞ エイ先帰つてよふ子を見よふと存る サニツク シ ウミよふ寝た事かなく 誰ぞ湯か茶かく  
 れい 是ハ如何な事 是ハ宿かと思ふたれハ海道に寝て居た 扱もくくしようたいもない事ウラミ是りや何者やら身  
 共か大事の髭をそつた 扱く悪ひ事をしおつたウミ南無三宝身共を坊主にした テモとふよくな事をしをつた 先  
 身共は宿をする時小袖をつほおり刀を指長刀をよこたへて出たか其様な物ハ一色もない こりや何ちや衣か有 こり  
 やはや壹ツも合点か行ぬ事ちや 是ハ先何とした事ちや知らぬ アミ誠ニ最前夢うつ、のよふに覚ゆるハ汝日頃悪心  
 なに依てケ様な姿となす けふよりしてハ善心と成て後生を願へ 則汝か名を南無阿弥陀仏と付ると聞と思ふと夢覚  
 ぬ 扱もく是悲もない事かな 先是を着すハ成まい 扱もく思ひも寄らぬ出家をとくる事ちや 宿へ帰つたらハ

きもをつふすて有う

出家

南無阿弥陀ア

イヤ何者やら某を呼かたつた今付た名を誰も知

るうよふはないか何とした事ちや知らぬ

出

南無阿弥陀ア南無阿弥陀仏南無阿弥陀ア ヤレくまさしう呼

そこちへよふて来るハ

出

是りや返事をせずハ成まい

出

南無阿弥陀ア

ヤア

出

南無阿弥陀仏

して居る

出

扱く世にハきやうかつた者か有る 御念仏を申せハ返事をする

出

あのよふな者ニハかまわぬ顔を

前の通り

ハア何て御

念仏を申そふ

出

南無阿陀ア

出

是ハ如何な事又呼 又返事をせずハ成まい

ハア何て御

出

是ハ如

何な事 返事をすれハ笑ふて居る

出

何とした事ちや

出

なもふたア

ウラミ今度ハせわしう

出

南もたア

呼そよ 乍去あのよふに返事をせずハ成まい

出

南もたア

出

何そいふ

出

笑く

ヤアのふく

出

南もたア

何ておりやる

出

やあら其方は聞へぬ 最前から身共か名を呼びやるに依て返事をすれハした物笑ふて

出

何ちや其方を呼

中く

出

して其方の名は何といふそ

お居やるか何んとした事ておりやる

出

ハテ知れた事南無阿陀仏といふ

出

如何ニも様子か有

出

先某は此辺りニ住居する悪太郎といふ者て有た 大酒にた

中く

出

夫は奇特な人ちや

へ酔路じとも知らず此処に寝て居たれハ夢うつ、の様に

出

先ハ悦ハしませ其方ハ仏縁の有人と見へた 南無阿弥陀仏といふハ忝も

出

何んとおしやる

南無阿弥陀仏といふハ忝も

出

方極楽浄土の(御) 仏の御名て中く人の付る名てハおりない

西方極楽浄土の(御) 仏のミ名て中く人の付る名てハおりないとおしやるか

出

思ひもよらぬ事ちや 諸

出

扱は六字の妙こうハ

出

夢に付たる

すれハ身共か名て

出

我名なれハ

二人

今よりハ思ひきりく只一心にみたをたのみ只一心に阿弥陀をたのんで念仏申て帰りけり

シテ 悪太郎 白コウシ 唐織ツホヲリ

下クミリ 少刀 長刀持

アト 出家 角頭巾 衣 むしのしめ

鉦シモク持

同 伯父 長上下

入用 十徳 かつら桶ふた 長刀

鉦シモク

### 瓜盗人

アト 是は此辺りの者て御座る。某瓜畑を持って御さるか此間ハ見廻ぬ。今日ハ見廻ふと存る。誠に地程てうほうな物ハ御さらぬ。時ミ手入さへ致せハ色く々な物か出来る事ちや。イヤ何角といふ内にはちや。ハミア此中しはらく見廻ぬ内におふきう成た。また色つく処てハない。乍去此よふな時油断をすれハ必鳥獄(マユ)か荒ス。先か、しを拵へよふと存る。誠に百姓程骨折な者ハない。乍去今年の様能ふ出来れハいか程骨を折てもさのみしんろうニも思ぬ事ちや。今おとしをして置は鳥獄(マユ)のあらず氣遣ひハない。一段とよい。垣ハ言付てさせうす。先今日ハ帰り重而見廻ふと存る。アト中入 シテ 是ハ此辺の者て御さる。某手前へならぬニ依てあなた此方へ参り口てうほうを持って一日くくと送る。漸瓜の時分に成て御さる程に瓜畑へ参り壹ツ式ツさいかく致て参ふと存る。誠ニ昼ハさいかくハ成らぬニ依て夜る参る事ちや。いかに手前ならぬねはとてあらぬたくみを致ス事ちや。イヤ何角といふ内に瓜畑ちや。扱もくとの畑もくくひしうかきをした。此様な事も有ふと思ふてのこきりを用意した。先垣をやふらふ。ズカくく。スツカリめりくくく。テモ鳴たりくくしつけぬ事。此の音を人か聞ふかと思ふて某の耳にちやつと手を当た。乍去誰も

聞なんたそふな 先垣をこそふエイくくのふく嬉敷やくまんまと垣を越へたハミア早や是に瓜か有ハ 亦是ハカ  
 れ葉ちや こゝにもあるハ是もかれ葉ちや 扱ハ瓜ハないかの 瓜かなくハ此様に垣ハせぬ筈ちやか何とした事ちや  
 ハア、思ひ出した 夜る瓜を取るにハころびを打て取るか能と聞た さらハころびを打て取て見よう 是てハとれぬ  
 といふ事ハ有まい されハこそ爰に有たハ 扱もく見事な瓜ちや 先是ハ爰に置いて今度ハ此辺りからころびを打と  
 ふエイくく笑 是りや今度ハ丁度枕に成た アミ取りよふも有物ちや 扱ミ能瓜ちや此よふな瓜ハついに見た事  
 もない 逆もの事二もそつと取ふ 此氣かとふから付はよかつた物をエイくくア、御ゆるされませくりやうし  
 な者てハ御さりませぬ とふそまよふて参つた者て御さる瓜も壹ツ二ツならてハ取ませぬ 是も進しませう程にとう  
 そ御ゆるされて被下 申く帰りませうか 申く其様に物を被仰いてハ迷惑に御さる 帰れならハ帰れと仰られて  
 被下 申く帰りませうか其方誰ちや エイかミしか エミうつけた人形にしきをするといふよふなうろたへた事か  
 有る物か 乍去腹の立 此よふな物ハ引くすして置たかよい 思へハく腹のたつ 瓜つるをも引上て退ふ 是く  
 是てよい 乍去瓜ハ取て帰ふ 最そつと取ふか イヤく壹度にこりいて二度のしをするといふ 先急て帰ふ シテ  
 中入  
 〱 のふく急しやく 此中ハ瓜畑江参らぬ 今日ハ見廻ふ 此中しはらく見廻ハぬ内に大方色ついたて有ふイ  
 ヤ是ちや ハ、ア垣かやふつて有 ハテ合点の行ぬ 瓜盗人ハはいりハせぬかのウヲミかミしか引くすして有 扱  
 くふしんな南無三宝瓜つるをもさんくにあらしおつた 扱ミ悪ひ事をしおつた 是ハ先何とした物て有ふぞ イ  
 ヤ此よふに荒いてハ置たれとも亦こぬといふ事ハ有まい 今度は某かか、しに成て居て瓜盗人をとらようと存る 扱  
 ミ腹の立事ちや 人の骨折て作る物を盗むのみならず瓜つる迄あらしおるといふハ思へハく悪ひ事ちや さらハ  
 か、しに成て居て瓜盗人を取らへよう 後シテ 扱もく迷惑な事て御さる 此間の瓜を去ル方へ進て御されは扱  
 ミ能い瓜ちや 是ハ汝か手作りかかと仰られたに依て中く手作りて御さると申たればふうみもよい程に最壹ツくれい  
 と仰られた今更作りませぬ共申されす亦此間の所へ行てさいかく致て参ふと存る 道行 誠に此よふな事と存たらハ  
 かミしも其儘置瓜つるをも荒すまい物を此様な迷惑な事ハ御さらぬ イヤ何角といふ内に是ちやハミア是りや垣か其





船渡掣

是は矢橋の浦の舟頭（矢橋の浦に守り居る舟頭、今舟を渡したまはたり舟ものしほと存る）て御座る。今朝壹番船を渡た（渡）亦戻り船を乗ふと存る（ト云テワキ座ノ下二居ル） 京辺土の者て

御座る 今日ハさいしよふ吉日て御座る程二掣人を致せふと存る 廻ル 誠二此の樽肴も人を雇ふて持せて参れハ能

ふ御され共左様ニ取繕ふたと有ツても行〜ハ知る、事ちやと存て自身持て参る事ちや イヤ何角言ふ内に船の乗場

へ来た 舟頭ハとれ二居るしらぬ イヤあれにつ〜くりとして居る さらハ呼ふ のふ〜舟頭との 何事て

おりやる 舟頭乗せてくれさしませ 心得た（何事せのふち） 追付舟（中く出せ）を付る先夫ニおまちやれ 心得まし

た エイ〜〜サア舟か着た乗らしませ 是ハ大事のものちや 是を先乗せてくれさしませ

とれ〜ホヲコリヤ能い物を御持やつたの（ト） そふもおりない さらハ乗らしませ アアエ（ト言テ）のる

静にお乗りやれ追付舟を出ス ゆるりとお居やれ 心得ました エイ〜〜 扱（モ）こなたハとれ

からとれへ御行やる 京辺渡の者て御座る 矢わせへ用事有て行者て御さる 扱其方ハ仕合な人ちや

某ハ今朝一番舟を渡イタニ依てお主（そなた）独なれ共乗せて行事ちや 夫ハ身共ハ仕合な者て御さる 扱其方の

御持ちやつた物ハことつかり物か但シ持参か 持参ておりやる 何ニ持参ちや 中〜

夫ならハ京酒て有ふのふ 成程京酒の念の入したのでおりやる シカ〜 ヤ是〜お主（お主）に初メ

て逢ふて（近頃）馴〜敷かちと無心か有か聞ておくりやるまいか 夫ハ何事ておりやる 無心といつば

別（別）の事て無イ 今朝一番舟を渡たれハ朝風に当て手かこゝゑて爐か押にくい 近頃無心ながら其（御持ちやつた）酒

を一ツお振まやれと言ふ事ちや イヤ爰な者かされを言しますよ されてハない心実ておりやる

何ちや心実ちや ラミ扱 イヤ爰な者か 此事く封迄付て持て行酒か何と呑さる、物ちや

されハ無心と言ふハ其事ちや ことつかり物ならハ左右も言まいか持参とおしやるニ依ての事ちや 平に吞さ

しませ 其上吞すれハ跡かすくのお成 とふ有ても成らぬ 夫こそ能い仕よふか有る此沢山な水を入れて

やらしませ 其様な鹿抹な事ハ成らぬ とふ有ても吞する事ハ成らぬ 夫ならハ是悲共成らぬか

くとい事をおしやる 何と匂ひを聞事ハ成まいか 夫ハやすい事ちや 是く聞しませ

とれく 扱くよいにほひちや 聞ぬ内ハ其よふ二もなかつたか匂ひを聞たれハ堪忍ならぬ 平

二おふるまやれ 吞す事はならぬ そふ言す共壹ツお振まやれ 成らぬといふにくとい事をいふ

人ちや 何ちやならぬ ラミ扱成らぬ ならちやならいて濟事を目に角を立て何ちや

吞まい迄よト言テ舟ヲ一エイくくく のふ舟頭殿船かかへるく早ふ留ておくりやれ 舟かかへる

ふと酒を吞そふとお主の心にある事ちや 酒ハとお成共せう早ふ舟を留ておくりやれ 何ちや酒ハとお

成共せう 中く 夫を聞ふ斗ちや 舟を留る分ハ心安いエイく 夫舟か留たサアく お振まやれ

兎角吞ねハならぬか くとい事をおしやる 何ぞ吞物か有か 何もなし

てお吞ミやる イヤ是にあかかへかある是て吞ふ 其様なむさいもので何と吞まる、物ちや

かきよめちや 其方ハ壹ツとわ言ぬか (ハテ) コリや何んとする (シカく)

最壹ツお振やれ 其方ハ壹ツと言ふハ言葉てこそあれも壹ツおつきやれ

いやといわれぬよふ二言ふ者ちや とふくく 壹ツと言ふハ言葉てこそあれも壹ツおつきやれ

しまわいて成ふか 近頃あこぎなれとも最壹ツお振まやれ 残りすくになに成た 其方ハはや仕廻たか

夫社沢山な水を入れて行しませ 其よふな鹿抹な事か何と成物ちや イヤく とふ事

ハならぬ

とふ事

てもふるまふ事ハ成らぬ

何ちや成らぬ

ヲ、扱

へつ夫ならハ吞まい迄よ

ト言テアクラカク下二居  
アト廻リ見廻シ

ヤアのふく舟頭との

舟か流る、く早ふ留めてくれさしませ

舟を留(かまふ)ふ共酒を吞まそふ共其方の

中く

こゝろ二有る事ちや

酒ハ吞そふ舟を留ておくりやれ

何ちや酒ハ吞そふ

舟を

留る分ハ心安いエイくくくサア舟か留た

今度はかるふつこふ

軽いハ気味か悪い丁度く 笑

ヲミあるくよふこそ御振まやした其替り二情を出して舟を付てやるふそ

エイくくく夫ミ舟か早ふな

つた

エイくくく夫舟かついたエイくく

夫舟かついた上らしませ

心得た

戻り二も

身共か船に乗ふそ

乗事てハないそ

扱舟を上ツて最早間ハないと聞た 先此辺りて尋て見よふ 物申

案内申 表に案内か有る案内ハ誰そ

京辺土の者て御さるかこなたてはし御座らぬか

そふ言わ

せらる、ハ智(お)殿(わ)てハ御(お)さらぬか

すれハこなたて御さるか

やれく嬉敷やく 是ハ私か参つた印て御さる

此なたさへ御さるならハ是ニハ及ませぬニ忝ふ御さる

扱舅殿ニハ御内て御座るか

近所ニ諺ひ

講か有つて参られた よふて来ませう

御帰りまてまぢましよう

此方の御さるを待こふて御座つた

呼て来ませう 是れの人とした事か朝出れハ日か暮ねハ帰らぬよふ二召る

のふくこちの人く

かしま敷い何事ちや

内ハハ智か見へました 早ふ帰らせられい

何ちや智か来た

中く

早ふ帰らせられい

智か来る筈ハないか

何しに童かいつわりを言ませうサアく出させられい

先物かけから見せい

心得ました

能い智かと思ふたれハあのよふな悪ひ智はな

いとつとミいなせ

あのよふなよい智はない

あれハ何そ持て来なんだか

いかニも樽着を持て見へました

夫ならハ身共ハあわれぬわい

夫ハ何とした事て御さる

（ベ）あれをおれか髻とハ知らず 最前身共か舟ニ乗せて（のませうとも言わぬ酒を）舟を流しつかふらかいつして酒を吞

ふたニ依て今更面目のふてあわれぬわいやい 女 エミちく生やくく其様な事をすると言ふ事か有物か

女 でも吞ふた物ハせう事かない 女 夫ならハ様を替て出させられい 女 様を替ると言て（別ニ仕舞をい、やい）

女 常く童ハ此方の髭か苦に成ます 髭を剃て出させられ 女 イヤ爰な者か 矢橋の大髭力渡しと言ふて西

国の大名衆迄か御存の髭ちやあの髻（有まかかてかひかまをい、まをい、まをい）にあわれぬと何とすらるるものちや 女 イヤく是悲とも剃せられ

女 是ハゆるしてくれい 女 夫ならハ童か剃まする 女 シカく 南無三宝剃たか 女 剃まし

た 女 何と見知りハあるまいか 女 童てさへ見わすれました 女 そふ有らハ出ふほとにそこの首尾を頼

そ 女 心得ました 出ル 是れのか帰られました 女 髻との初対面て御座る 女 （不案内ニ御さる）私

も早速参る筈て御座つたれ共何かとしておそなりました 女 こなたの御ひまのないハ承りおよひておりました

女 是は髻殿の御持せて御さる 女 此方さへ御されハ是にハ及びませぬに忝ふ御さる 女 心まで、御さ

る 女 開きましよふか 女 とふもせい 女 心得ましたーお盃を持ちました 女 髻殿夫へまいらぬか

女 いた、きましよふー 女 先ツ参つて被下 女 そふあらハ吞ふてさしましよふ 女 シカく

つくなく 女 勇殿ニハ酒ハをすぎと聞きましたか 女 かつてたへませぬー扨是を髻殿江さしませう

頂きましよふー 女 壹ツ被下ませう 女 髻殿ニハ酒か成てよい事しやノヲ 女 私も壹ツハ被下升る扨是を舅との

江上ませう 女 壹ツ上りませ（シカく） 女 つくなく 女 あのよふに言せらる、ニ壹ツ参れ 女 己か何

を知りをつてつくなく 女 扨髻とのも壹ツ参らぬか 女 最早たへますまい 女 夫ならハとれ 女 童ハ勝手て

ゆるりと盃をしませう 女 一段とよふ御座らふ 女 扨舅殿ニハ最前から白ニ袖を当て御さるか何とした事で御さる

御さる平ニとらせられい 女 是ハゆるして被下 女 左様ならハ身共か取ましよふ 女 御貞を見しる為て

袖ヲトリ髻願ヲ 女 是ハ如何な事 女 あれハ最前の舟頭ちや 女 申よふかある 女 いかによく舅殿何しニ髭を剃たそ

見テヒラク

南無三宝見付られた 最前矢橋の舟をかふらかひて酒をのふた故也  
 角二も舅殿に参らせんか為なり 御心さしわ嬉しけれと面目のふハ存る  
 名残おしや 此方も名残りおしけれとあの目を御らふせ 山のは二懸、た 両  
 梅わほろりと落るとんもまりハ枝にか、つたとまつた 山のは二懸、た 両  
 〆 イヤ〜夫ハ苦敷からす 兎二も  
 〆 さらハ暇申さん 〆 あら  
 〆 めい〜さりりつと

シテ 羽織 袴一クミル ヲクソ頭巾  
髭竹 シシヤク

アト 髪目 カケ素袍袴  
樽肴 竹

女 如常

茶 壺

アト さ、んさア浜松の音はざんざア笑 よふたり〜 是二道か幾筋も有る とれを行ふそ是を行ふか〜イヤ  
 ちと寝て行ふエイ〜〜よふたり〜 〆 是は此辺りに住居する心の直にない物で御さる此中打続きふ仕合二  
 御さる 今日ハ海道へ参りひと仕合致しなをそふと存る 誠に此中の様なふ仕合な事ハ御さらぬ 今日ハ仕合か致し  
 たい物ちや イヤあれに何者やら寝て居る起てやらふ ヤイ〜爰は海道ちや起て行いやひ ヤイ爰な者〜 フウ  
 しゆくしくさやの〜しやう躰ものふ酒によふて寝て居る 乍去見れハよさそうな物を持て居る あれをこの方へさ  
 いかくいたそふと存る サシ足シテ 扱、ぬからぬやつちや 片れんしやくに手を懸て寝て居る 何とした物て有ふそ  
 イヤ致よふか有る 片レンシヤクニ手ヲ  
 〆 フウよふ寝た事かな〜 是ハ如何な事 ヤイ爰な者〜 〆 フウ

よふ寝た事かなく 是ハ某のちやこちへおくせ 是ハ某のちやこちへおくせ

誰もないか出合へく 出合へく 目代 是ハ先何とした事ちや 左右被仰る、ハ殿方で御座る

殿方で御さる 所の目代ちや 目代殿ならハ急度御礼を申升 一礼申ませう 目 イヤ

礼にハ及ぬ 是を身ともへ預ケい 預るニハ及ませぬ私ので御さる 私のて御さる 目 理悲を

聞て渡そふ 先身共へ預ケい 左右あらハあのちやく者にやらせられて被下る、か 心得た

シテ二右之通りいふ ヤイく 汝はどここの者ちや 中国の者て御座る 目 あれハ何ちや 茶て御

シテモ右之通りいふ 中国の者て御座る 中国の者て御座る 目 あれハ何ちや 茶て御

さる 私の頼ふな者茶すきて毎年梅の尾江茶をつめに登り升 当年も登て御座れハ道に存た者か御さつて是へ立寄大

御酒ニたへ酔路しとも存せず寝て居ましたれハアレあれに居るおふちやく者か私の片れんしやく二手を懸て我が物ち

やと申升 あのおふな者にハ急度仰付られて被下 目 すれは汝のか 左様て御さる 目代前ト同断いふ

ハテ合点の行ぬ壹ツ物に二人り主の有ふ様ハない ヲトノ方へ ヤイく ハア 目 汝のならハゑん

所入日記を知て居るか 如何ニも私か側に居て詰さした茶て御さるニ依てよふ存ており升 目 左右あら

ハ言へ 成程申まするかあのものも申か御尋被成被下 心得たヤイく ハア 前如し 目 左右あら

ふあらハあの者もいおふと言ふか汝も言か あおきやつか申そふと申升か 目 中く アミきやつかぞん

じやうよふは御座らぬ 先あの者から言へと被仰て被下 目 こゝろへた 先汝から言へ 目 こゝへました

諷い 我か物ゆへに骨と折く 心の内そおかしき 目 おかしき 色左候へはこそく おれか主殿は中

国一の法師にて日の茶を立ん事なし 一ぞくの寄合に本の茶を立んと五十くわんのくりを持ち多くの足を遣ふて兵庫

のつにも着たり 兵庫を立て二日にとかの尾ニも着しかハ峯の坊谷の坊殊にめいよしけるハ赤井の坊のほかせを拾き

ん斗り買とり兵庫を差て下れハこやの、宿のゆふ女の袖をじつとひかへて今ようろう詠しをりはきをうとうておさへ

て酒をしいたり 酒に酔ふて寝たるを日本一のおふふのあの古博奕うちか来たつて我か物と申をはんたんなしてたび

給へ所のけんだん殿様 目 汝はよふいふた サアく 汝もいへ 目 畏て御さる 前ノコトク 言ナリ 目 汝もよふ

言ふた 是てハすまぬニ依て相舞ニせい 畏て御さる 汝も相舞ニせい 心得ました 心得ました  
 ア〜御出やれ 先お出やれ 我か物ゆへに骨を折る〜心の内そおかしき おかしき  
 左候へハこそ〜引 ハア 社おれか主殿ハ中国一の法師にて日の茶を立ん事なし 一そ  
 くの寄合にほんの茶ヲ立んと五十くわんのくりを持おふくの足を遣ふて兵庫の津二も モウ  
 二人 着たり 兵庫ヲ立て二日に梅の尾二も着しかは峯の坊谷のほふ毎にめいよしけるハ赤井の坊のほかせを拾きん  
 斗り買取り兵庫を指て下れハこやの、宿の遊女か袖をしつと ジイ シイ とひかへて今よふる  
 ふ詠しをりはきをうたうておさへて酒をしひたり 酒に酔ふて寝たるを日本一のおふふのあの古博奕打か来たつてわ  
 か物と申をはんたんにしてたひ給へ所のけんたん殿様 二人共よふいふた ちと汝等にいゝきかす事か有る是  
 へよれ 心得ました 畏て御さる つうとよれ ハア 惣して昔から論ずる物ハ中  
 から取るといふ 是ハ某のにするそ ア、申 夫は私ので御さる やるまいそ〜  
 二人 ちやつと取らへい〜 ならぬそ〜 やるまいそ〜

## 梟山伏

弟 是は此辺りノ者て御座る 某兄を持て御さるか 此頃山へ参つてより物のけのよふてわるう御さる 今日ハ御  
 先達を御願申一加持致て貰ふと存る 誠ニ御先達の御内に御座れハよいか内に御座つたらハ来て被下ぬといふ事ハ有ま  
 い イヤ何角と言ふ内にはちや 物申案内申 シア 九しきの窓のまへ江十せうのゆかのほとりにゆかのほつすいを  
 たミへ三みつの月をすます所に案内申さんとハ誰そ 弟 私て御座る シア エイ爰な者か 足元から鳥の立よふ  
 ニする 扱けふハ何と思ふて来た 弟 今日参る別の事ても御座らぬ 私の兄御存て御座り升か そちか兄



誰知て居る 夫か何とした

弟 此中山へ参ッてより物のけの様でわるふ御さる 今日ハ此方御頼み申一加持致

て貰ふと存て参りました

弟 此中は別きやうの子細有て何方へも出ね共そちか事ちや行てやらうそ

弟 夫は

難有ふそんし升 左右あらハ今からても御出被成て被下りやふか

弟 左右

あらハいさ御出被成ませ

弟 何か扱先そちから行ケ

弟 一段とよかるふ

弟 サア〜御出被成ませ

弟 心得た

弟 誠ニ今日ハ此方御出被成て被下て忝ふ御さる

弟 某か行

て一加持してやつたらハ早東本服するて有ふそ

弟 夫はありかたふ存升るイヤ何角といふ内に是て御さり升る

弟 誠ニ是ちや

弟 先こう御通り被成て被下

弟 こ、ろへた扱病人ハとれ二居る

弟 奥に寝させて置

ました

弟 是へつれて来い

弟 こ、ろへました

弟 サア〜氣を慥に持て御先達の御出被

成て氣を慥にもて〜ハア病人をつれて来ました

弟 こ、ろへました

弟 ア〜いこうやつれたなア

弟 左様で御さる

とれ〜みやくを見よふ

弟 兎も角も被成て被下

弟 何と被成升

弟 そつとも氣遣ひするな 惣して人

間のみやくハ左右の手で取れと此よふな物のけなとハづみやくといふてつて取物ちや

弟 夫山伏といつは山におき伏すに依ての山伏な

弟 尤な事て御座る

弟 尤な事て御座る

〜何と聞へた事か

弟 尤そふな事て御座る

弟 夫山伏といつは山におき伏すに依ての山伏な

弟 追付一加持してやらうそ

〜くに依てときんなり

弟 聞へた事て御さる

弟 いら高の珠数でハのふて只むさとした珠数玉をつなき集め

いふたそよ

弟 ホホンとやら申ました

弟 誠にホホンとやらいふた

兄 ホホン

弟 何とやら

外ニおもひ当る事も御さりませぬか此中山江参てふくろの巢をおろいたとやら承りました 定而ふくろの附たのて御

さりませう

弟 皆迄いふな うたかひもないそうて有ふそ

弟 定而ふくろの附たのて御

いと聞た 最一加持してやらうそ

弟 夫は難有ふ存升

弟 つかいに悪しん深きふくろ成共からすの印の結び

かけいろはにほへとんと祈るならハ杯かちりぬるをわかなれほろう

弟 夫は難有ふ存升

弟 つかいに悪しん深きふくろ成共からすの印の結び

〜

弟 夫は難有ふ存升

弟 つかいに悪しん深きふくろ成共からすの印の結び

兄 ホホン

弟 ホホン

シ 是はいかな事又弟にも付た 扱くにかく敷い事ちや いかにあちらこちら六ヶ敷ふくる成共今一析析るな  
らハなとか気毒のなかるらんほろんほろうくくくくく

シテ 山伏  
キツケ 水衣 半クミリ トキン  
スミカケ 少刀 珠数

アト 弟  
半上下

同 兄  
髪サハキ ツホヲリ ハチマキ  
キヤハンカタアシニ而もよし

兄  
ホホン  
弟  
ホホン  
シ  
ホホン